

静岡県社会福祉士会における実践研究支援の意義と今後の課題 ～6年間の活動から見てきたこと～

静岡福祉大学 檜木博之

要旨

静岡県社会福祉士会（以下県士会）では 2019（令和元）年度より、会員に対して実践研究支援を行ってきた。本発表では、本活動のこれまでを振り返り、県士会として会員の実践研究を支援する意義と今後の課題について明らかにすることを目的としている。筆者がこれまで行った研修支援を振り返り、一定の効果が出ていること、一方でまだ課題を残していることを検証する。

1 研究目的

静岡県社会福祉士会では 2019（令和元）年度より、会員に対して実践研究支援を行ってきた。研修支援を行った一人として、本活動のこれまでを振り返り、県士会として会員の実践研究を支援する意義と今後の課題について明らかにすることを目的とする。

2 研究方法

筆者が 2019（令和元）年度より、行ってきた実践研究支援を振り返り、支援した研究が県士会の研究誌である「社会福祉士静岡」への投稿及び 3 団体合同で実施している静岡県ソーシャルワーク実践研究学会での発表に繋がった数を明らかにする。繋がった研究と繋がらなかった研究の違い、そして研究支援を行った上での意義や課題を考察していく。

倫理的配慮として、個人が特定されないように配慮している。

3 結果

(1) 県士会での実践研究支援の推移

これまで静岡県ソーシャルワーク 3 団体では 10 年以上に渡って実践研究学会を行ってきたが、発表者が多いとは言えない状況が続いている。その要因として、「研究などしている時間がない」「日々の業務で余裕がない」などの声があるが、その中でも「実践研究のやり方が分からない」が多く聞いている。そのため県士会では、社会福祉士が実践研究を行うことができるように、実践研究セミナーと実践研究支援を継続的に行っている。実践研究は県士会と研究者、研究支援者の 3 者契約にて、実施している。

実践研究支援の到達目標としては、実践研究学会での発表、若しくは県士会で毎年発行している研究誌「社会福祉士静岡」への投稿である。

実践研究支援は 2019 年度から実施し、現在まで延べ 19 名が実施している。

(2) 筆者が行った実践研究支援数と投稿・発表件数

これまで実践研究支援を行ってきた延べ 19 名（実人数 14 名）にうち 11 名（実人数 7 名）を筆者が担当している。その中で実践研究の到達目標である実践研究学会での発表、若しくは研究誌「社会福祉士静岡」への投稿に至ったのは、10 件（実践研究学会発表 7 件、研究誌投稿 3 件）であった。

(3) 実践研究支援の方法

研究計画書の作成指導、研究・分析方法のアドバイス、学会発表・研究誌投稿の添削指導をメール及びオンライン面接で行っている。頻度は研究者によって違っている。

(4) 実践研究を行った上での効果と課題

3 者契約にしたことで、研究支援が進まない件数は減少し、目標である実践研究学会での発表、研究誌の投稿に繋がってきている。研究支援の申請も少ないながらも毎年出ている。

課題としては、ソーシャルワーカーが研究を行うことの意義を理解するに至っていないこと、メールでの添削が中心になると指導の限界があること、タイムリーに指導ができないこと等が挙げられる。

4 考察・結論

県士会で実践研究支援を行うことで、一定の効果が出ていることが明らかとなった。一方で、この活動をとおしてソーシャルワーカーが実践研究を行う意義が広がったとは言えない状況は続いている。今後の課題として、県士会で実践研究を行っていることの会員への周知、実践研究支援の効果検証、県士会における実践研究支援の在り方の検証を行っていくことが必要ではないかと考える。

ソーシャルワーカーが実践研究を行うことの意義を広める活動を今後も展開していきたい。